

和漢朗詠集近世板本の短歌表記における漢字

Chinese Characters in Writing of Japanese Poetry in Wakan-Rōeishū

石井 久雄

39字/行×32行/葉×13葉=400字/枚×40枚（標題部39字/行×7行を冒頭に含む）

1 問題

和歌は元もと専ら仮名で記されていたと思われ、例えば、古今和歌集高野切では、現在知られる315首分の和歌本体を記す文字延べ9731において、漢字は9字、比率として0.09...%であり、異なりは6字、「花（出現頻度4）、見、人、世、中、日（以上各1）」に過ぎない（石井2013）。現代では、古典の教養のために提供された幾つかの古今和歌集について、短歌一首を記した平均を見ると、漢字4～8字、比率15～30%あたりである（石井2014）。一千年を経て、漢字が次第に増えたと考えられるかもしれない。

和漢朗詠集における和歌は、やはり元は概ね仮名で記されたと考えられる。今では古今和歌集なみの漢字の量で記されるが、次第に増えたというよりは、近世板本において、仮名が少ない状態がまだ維持されていたようである。近世板本の様相を、以下に定量的に述べる。本稿の中心は3であるが、前提の説明として2が長くなった。

2 古写本で

2. 1 和歌は専ら仮名で記されたであろうということは、和漢朗詠集の古写本でも知ることができる。いま、11世紀半ばに筆写されたと見られ、完本の姿を残す、次の三本を取り上げる。写真によるので、写真の所在を示し、また、極簡略な紹介を添える。

関戸本 倉田実『和漢朗詠集 関戸家蔵』（1919年、槃礪堂）

……零本を関戸家ほか現蔵。かつて関戸家が完本を所蔵し、この写真がその全貌を伝える。筆写者は、古今和歌集高野切第二種も筆写した源兼行とされる。

雲紙本 小松茂美『古筆学大成 第13巻 和漢朗詠集1』（1990年、講談社）

……旧御物、三の丸尚蔵館現蔵。筆写者は関戸本と同じく源兼行。

粘葉本 古谷 稔『粘葉本和漢朗詠集〈巻上・下〉』

（1993年、二玄社、日本名筆選8・9）

……旧御物、三の丸尚蔵館現蔵。和漢朗詠集の本文の現在の標準である。

この三本の和歌数・文字数・漢字数などは、次のようである。右端に三木雅博とある

ものについては、後述する。

	関戸本		雲紙本		粘葉本		三木雅博	
	短歌	旋頭歌	短歌	旋頭歌	短歌	旋頭歌	短歌	旋頭歌
歌数	212	2	212	2	215	1	214	2
漢字異なり	14	0	16	0	29	1	366	13
延べ	15	0	23	0	52	1	1536	15
比率	0.22	0.00	0.34	0.00	0.77	2.63	27.27	23.80
文字延べ	6621	76	6614	75	6679	38	5631	63
仮名のみの歌数	207	2	199	2	186	0	0	0

漢字比率は文字延べに対する漢字延べの百分率であり、いずれの伝本でも1%を切って、すなわち文字の99%以上は仮名である。仮名のみで記された短歌も、短歌の総数に対する比率で言えば、97.6%，93.8%，86.5%である。和歌がもとは仮名のみで記されたという様相は、和漢朗詠集における和歌の表記にも、引き継がれていると言ってよい。

短歌における漢字を伝本ごとに一覧すると、次のようである。常用漢字表にあるものはその掲示順序で、他はその後にユニコードの順序で並べ、数字は出現頻度である。

関戸	雲紙	粘葉	関戸	雲紙	粘葉	関戸	雲紙	粘葉	関戸	雲紙	粘葉	関戸	雲紙	粘葉					
桜	-	-	2	昨	-	-	1	人	-	1	10	提	1	1	2	恋	-	-	3
花	1	7	4	三	2	2	2	吹	-	-	1	日	-	-	3	擗	-	-	1
賀	1	1	1	山	-	1	3	世	-	-	1	風	1	-	-	菩	1	1	2
樂	1	1	-	秋	1	-	-	雪	-	-	1	仏	-	-	1	藐	1	1	1
極	1	1	-	出	1	1	-	多	-	1	1	名	-	-	1	匏	1	1	-
君	-	-	1	松	-	-	1	達	-	-	1	冥	1	1	-	阿	-	-	1
見	-	1	-	心	-	-	1	中	-	-	1	羅	-	-	1				
今	-	-	2	身	-	-	1	鶴	1	1	-	覽	-	-	1				

関戸本に比して雲紙本・粘葉本は漢字比率が大きく、そこに「花」「人」が絡んでいることが明らかである。漢字「花」は、高野切にもよく現れ、和歌の表記に夙に入った漢字であると評価してよい。漢字「人」は、粘葉本を特徴づけるかもしれない。

2. 2 やや奇異に見える漢字は、漢語を表記して現れる次である。歌の前に、本の名の最初の1字と新編国歌大観番号とを示す。対比のために、三本を並べる。

関601 極 樂 は ゝるけきほどゝ きゝしかど つとめていたる ところなりけり

雲601 極 樂 は ゝるけきほどゝ きゝしかど つとめていたる ところなりけり

粘601 ごくらくは ゝるけきほどゝ きゝしかど つとめていたる ところなりけり

関602 あのかたら 三藐三菩提の ほとけたち わがたつそまに 冥賀あらせたまへ

雲602 あのか多ら 三藐三菩提の ほとけたち わがたつそまに 冥賀あらせたまへ

粘602 阿擗 多羅 三藐三菩提の 仏 達 わがたつそまに 名賀あらせたまへ

次の短歌は関戸本・雲紙本に見えない。

粘603 このよにて 菩提のたねを うへつれば きみがひくべき 身とぞなりぬる

粘葉本のみに見える漢字として、例えば「今」「昨」「日」がある。

粘 35 あすからは わかなつませむ かたをかの あしたのはらは 今日ぞやくめる

粘146 はなのいろに そめしたもとの をしければ ころもかへうき 今日にもあるかな

粘 77 昨日こそ としはくれしか はるがすみ かすがのやまに はやたちにつけり

粘葉本で、次の下線部は、助詞を読み添えて「よのなかに」である。助詞を読み添えなければならぬ事例は、三本のうちではこの1箇所のみである。

粘123 世中 たえて桜の なかりせばゝるのこゝろはのどけからまし

次の下線部は、漢字であるが、用法として仮名である。対比のために、三本を並べる。

関789 いまこむと いひしばかりに ながつきの ありあけのつきを まち出鶴鉤

雲789 いまこむと いひしばかりに ながつきの ありあけのつきを まち出鶴鉤

粘789 いまこむと いひしばかりに ながつきの ありあけのつきを まちいでつるかな

関798 すゑのつゆ もとのしづくや よのなかの おくれさきだつ しるべなるらむ

雲798 すゑのつゆ もとのしづくや よのなかの おくれさきだつ しるべなるらむ

粘798 すゑのつゆ もとのしづくや よのなかの おくれさきだつ ためしなる覽

2. 3 和歌の異動について、簡略に注記する。関戸本・雲紙本は、筆写者も同じく、本文もほとんど同じい。粘葉本はやや異なり、次の短歌2首は、関戸本・雲紙本になく、粘葉本にある。

粘564 やまざとは ふゆぞさびしさ まさりける ひとめもくさも かれぬとおもへば

粘603 このよにて 菩提のたねを うへつれば きみがひくべき 身とぞなりぬる

旋頭歌は、次の1首が三本に共通する。関戸本で代表させる。

関732 ますかゞみ そこなるかげに むかひみてみる

ときにこそ しらぬおきなに あふこゝちすれ

次の1首は、関戸本・雲紙本で旋頭歌であり、粘葉本で短歌である。

関440 かのをかに くさかるをのこ しかなゝかりそ (雲紙本しかなかりそ)

ありつゝも きみがきまさむ みまくさにせむ

粘440 かのをかに くさかるをのこ しかなかり きみがきまさむ みまくさにせむ

次の短歌796aと797とでは、関戸本・雲紙本に796a番歌のみがあり、粘葉本では797番歌のみがあつて、他方はない。新編国歌大観に見えない和歌の番号は、前の和歌の番号に a を付する。

関796a よのなかは ゆめかうつゝか うつゝとも ゆめともしらず ありてなければ

粘797 てにむすぶ みづにやどれる つきかげの あるかなきかの よにこそありけれ

なお、次の短歌1首で、雲紙本第2句は、字余りの域を超える字数の多さになっている。

下線部4字を字数に集計せず、すぐ上の2. 1の漢字の事例でも省いて掲げた。

関788 いまこむと いひしばかりに ながつきの ありあけのつきを まち出鶴鉦

雲788 いまこむと いひてわかれしばかりに

ながつきの ありあけのつきを まち出鶴鉦

粘788 いまこむと いひしばかりに ながつきの ありあけのつきを まちいでつるかな

さて、関戸本・雲紙本と粘葉本とは本文で対立し、一例を、短歌603の有無、短歌796aと797との交替として、すでに挙げたことになる。和歌の有無は、漢字の異なり・延べに影響する要因である。例えば、粘葉本のみ603番歌に用語「たね」があり、古写三本のうちでは他の和歌に見られず、粘葉本で漢字で記されたときには、関戸本・雲紙本では対抗できないのである。関戸本・雲紙本の796a番歌の用語「うつつ」は、他に見られないものであり、漢字の出現について伝本のたちばが用語「たね」と逆転する。

順序の前後も散見し、大きいものでは、上巻の春の部で、漢詩も含めて、関戸本・雲紙本は躑躅（和歌139）および款冬（142～143）の類を藤（135～136）の類に先立たせ、粘葉本は藤の類を先立たせる、といったことがある。細かい前後には、立ち入らない。順序の前後は、用語・用字に直接には影響しない。

2. 4 上の集計に、三木雅博として、現代のものを添えた。次の本文である。

三木 雅博『和漢朗詠集 現代語訳付き』

(2013年、角川学芸出版、角川ソフィア文庫)

本文は粘葉本を底本として作成され、440番歌を旋頭歌に校訂している。

440 かの岡に 草刈る男 しかな刈りそ ありつつも 君が来まさむ み馬草にせむ

短歌一首ごとにおける文字数・漢字数の分布は、次のようである。例えば、文字数31のものは合計3首あって、漢字5字を含む2首と、漢字7字を含む1首である。文字数30のものは合計6首、漢字5字のものは合計34首である。ここから、分布の中心になるようなところは求めがたい。平均は、文字数 $26.31=5631$ 字/214首、漢字数 $7.17=1536$ 字/214首

短歌漢字	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	旋頭歌漢字	6	9		
文字	214	1	3	17	34	34	26	43	24	20	7	1	4	文字	2	1	1
31	3	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	32	1	1	-	
30	6	1	-	3	2	-	-	-	-	-	-	-	31	1	-	1	
29	15	-	-	5	5	2	1	1	-	1	-	-					
28	38	-	3	2	9	7	8	4	-	2	2	1	-				
27	39	-	-	5	7	8	3	7	5	1	2	-	1				
26	37	-	-	1	3	11	4	9	6	1	1	-	1				
25	36	-	-	1	4	5	5	7	5	9	-	-	-				
24	28	-	-	-	2	1	3	9	5	5	1	-	2				
23	8	-	-	-	-	-	1	5	1	-	1	-	-				
22	4	-	-	-	-	-	-	1	2	1	-	-	-				

として得られる。旋頭歌を念のために添える。

もともと専ら仮名で記されていた和歌が、なんらかの過程を経て、現在のこのような状態に到った。その過程が明らかにされてよい。

3 近世板本で

3. 1 和漢朗詠集は近世においても書の範の雄であり、板に夥しく彫られたその全容を捉えることは困難である。ここに取り上げるのは、そのまことに一端の、9点である。

- ・ 和歌は、漢詩1行に相当する幅に、上句1行・下句1行の2行で記され、
- ・ 本文では、上巻の春の部で、古写の関戸本・雲紙本のように、躑躅（和歌では139番）および款冬（142～143番）の類が藤（135～136番）の類に先立ち、
- ・ 440番歌は、関戸本・雲紙本のように、旋頭歌であり、
- ・ 古写の粘葉本のように、564番歌および603番歌を具える。

といった特徴を具える。和歌を2行に記す際の改行の位置は、古写三本でも近世の他の板本でも、第4句または第3句のうちにあることはしばしばである。ここでは、和歌を2行で記し、改行位置が揃っている板本を取り上げ、その短歌を見ることになる。板本9点にA～Iの名を与えて、いま少し詳しく見る。ただし、書誌事項には触れないが、

【A】1648正保5年正月12日、京・柁屋西村次郎衛門板写。尾題の後に、「延文元年七月廿日為佳々手本所書与也殊刷筆体不可聊爾 永為家珍可伝来葉而已」とあって、尊円法親王の書を板に写したことを、刊記で「板写」と言ったかと思われる。

- ・ 本文では、次を107番歌の前に移し、立春の類のうちに古写三本が年内立春をまとめていたのを、まとめなおしたことになり、その点は下記B～Fにも共通する。

A 3 としのうちにはるはきにけり ひとゝせを こぞとやいはん ことしとやいはむ

- ・ 次の両者を具え、その点も下記B～Fに共通する。

A796a 世のなかは ゆめかうつゝか うつゝとも ゆめともみえず ありてなければ

A797 すゑのつゆ もとのしづくや よの中の をくれさきだつ ためしなるらん

- ・ 古写三本に見えた次を欠き、この点も下記B～Fに共通する。

G174 ほとゝぎす はなたちばなの かをとめて なくはむかしの ひとやこひしき

- ・ やはり古写三本に見えた次を欠くが、この点は下記B～Dに共通する。

関343 かはぎりの ふもとをこめて たちぬれば そらにぞあきの やまはみえける

- ・ 古写三本に見えた次を欠いて、

関434 しぐれふる おとはすれども くれたけの などよとゝもに いろもかはらぬ

次を補い、この点は下記B～Cに共通する。

A434a よにふれば ことの葉しげき くれ竹の うきふしごとに うぐひすのなく

なお、下記B以下すべてに見える次の2首を具えず、その点は古写三本に通ずる。

B395a としのうちに つくれるつみは かきくらし ふるしらゆきと 共にきえなむ

B652a いかになを ひとりもとはん あやしきは おもはぬなかの えさるまじきを

【B】1692元禄5年如月吉辰、大坂・毛利田庄太郎繡版、外題角書「尊円」。

【C】1782天明2年7月、筆者沢井随山、京・勝村治右衛門・中川藤四郎によって外題角書「再刻」とする。沢井随山については、知られるところがほとんどない。

・ 板本B・Cの本文の特徴は、Aで記したうちに尽きている。Aとの違いは、395a番歌・652a番歌を具えることである。

【D】1824文政7年12月、龍章堂閑齋書、京・菊屋長兵衛等4書林。閑齋西川龍章堂は、近世後期の御家流書家として、板本多数に筆跡を遺している。

・ 本文はほとんどB・Cに同じい。ただし、434番歌・434a番歌双方を具え、この点は以下の板本すべてに共通する。

・ 次の一首を欠く。独自異文であると見られる。

A537 きみなくて あれたるやどの いたまより 月のもるにも 袖はぬれけり

【E】1683天和3年6月吉日、京・井筒屋六兵衛・江戸・参河屋久兵衛、外題角書「首書」。漢詩全文について右側に施訓し、紙面の上部1/7程度で漢詩の字句を註釈する。

・ 本文は、343番歌を具え、その点は以下の板本すべてに共通する。

【F】1706宝永3年正月吉祥日、京・水玉堂梅村市郎兵衛版、内題・外題『和漢朗詠集旁訓』。上巻に序文があり、その末尾に「童蒙のみやすからむが為に傍訓をなして此集の大概をしらしむといふ事しかり 宝永三年季春上旬 洛下水柳軒」とある。傍訓・旁訓は、漢詩全文の右側に施訓することとともに、漢詩・和歌の全文の左側に通釈することを意味する。下巻末尾の刊記の前に「城南農奴任所望染筆了 清水氏」とあるが、水柳軒とともに、いま知られるところがない。

・ 本文は、古写三本およびA～Eが旋頭歌とした次の一首を、短歌とする。この点は、以下の板本すべてに共通する。いまAの旋頭歌も併せ掲げる。

A732 ますかゞみ そこなる影 に むかひみてみる

時にこそ しらぬおきなに あふ心 ちすれ

F732 ますかゞみ そこなるかげに むかひみて しらぬおきなに あふこゝちすれ

【G】1642寛永19歳仲秋吉日、板行者不記載。

・ 本文は、3番歌を立春の類の前半末尾に位置させて、つまり年内立春を設け、

・ 次の17a番歌を、630番歌があるにもかかわらず、重複させ、

G 17a みわたせば やなぎさくらを こきまぜて みやこぞはるの にしきなりける
 G630 見わたせば やなぎさくらを こきまぜて みやこぞはるの にしきなりける

- ・ 174番歌を具え、
- ・ 次の2首を欠く。

A111 はるくれば しだりやなぎに まよふいと の いもがこゝろに よりにけるかな

A796a 世のなかは ゆめかうつゝか うつゝとも ゆめともみえず ありてなければ

以上の本文の特徴はH・Iにも共通し、御家流のA～Dに対立する一群が存在したことを示すであろう。E・Fは、基本は御家流であろうが、434番歌・343番歌があることで、いま一つの側と交流したことになる。

【H】1725享保10歳正月吉日改正，京・菊屋喜兵衛版，外題角書「絵解」・内題『和漢朗詠図解』。刊記直前に跋文があり，末尾に「今此和漢朗詠集絵解は文字仮名づかひ等吟味を遂詩歌のこゝろを画図にあらはし童蒙にさとしやすからしめむ事しかり」とする。紙面の上部1/3程度に，漢詩・和歌の趣旨を表す絵を各面3図配する。

【I】1703元禄16歳仲春日，洛東浅茅氏書，既康堂板，外題『和漢朗詠集大成』。紙面の上部1/4.5程度に，和漢朗詠集と直接には関係しない「瀟湘八景詩歌」「唐詩仙」「三十六人の歌仙」などを記す。

- ・ 板本H・Iの本文の特徴は，Gに同じい。

3. 2 近世板本9点における文字・漢字の概要は，次のようである。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I
短歌数	213	215	215	215	217	218	218	218	218
漢字異なり	63	72	69	94	166	132	42	76	122
・ 延べ	216	285	290	279	484	416	178	218	321
・ 比率	3.31	4.36	4.43	4.27	7.57	6.39	2.63	3.27	4.90
文字延べ	6513	6535	6538	6525	6387	6506	6749	6654	6550
一首平均文字数	30.57	30.39	30.40	30.34	29.43	29.84	30.95	30.52	30.04
・ 漢字数	1.01	1.32	1.34	1.29	2.23	1.90	0.81	1.00	1.47
漢字数0の短歌数	76	52	50	61	28	32	<u>99</u>	<u>86</u>	59
・ 1	<u>84</u>	<u>78</u>	<u>80</u>	<u>82</u>	52	58	71	76	<u>69</u>
・ 2	35	57	56	42	52	63	38	33	50
・ 3	15	22	21	20	44	43	9	18	19
・ 4	1	5	7	3	26	13	1	4	15
・ 5	1			4	7	6			3
・ 6				1	5	1		1	1
・ 7		1	1	1		1			2
・ 8	1			1	1	1			
・ 9					1				
・ 10					1				

漢字比率 (=漢字延べ/文字延べ) は、板本E・Fを除く7本で、板本G 2.63%を最小として5%未満に収まる。漢字数1でその比率に収まるときの文字数を逆算するならば、38から20までであり、漢字数2で文字数76から40となって、一首の短歌の平均像は漢字1字を含むものであることになる。この比率は、現代の三木雅博本に比べるならばいまだ1/10であるが、古写の関戸本・雲紙本に比べるならばすでに10倍である。600~700年をかけて10倍になり、200~300年をかけてその10倍になった、と見立てるのは乱暴であろうが、現代の状況から見て、近世の漢字出現はいまだよく抑制が効いていた、少なくともそのような一群があった、と考えるのは不当でないであろう。

漢字数幾つの短歌が幾首あるかという見かたをすると、漢字比率あるいは一首あたり漢字数が最も小さい板本G・Hでは、漢字数0、すなわち専ら仮名で記された短歌が最も多い。ただし、漢字数1のものも、それに肉迫する数が多い。そうして、漢字比率あるいは一首あたり漢字数がそれより大きい他の板本A~DおよびIでは、漢字数1のものが最も多く、漢字数0のものはその次あたりに落ちる。近世板本においては、平均値のみならず、最頻値でも、漢字数1が短歌の表記の主流である。

文字数・漢字数の組み合わせについて、板本A~DおよびG~Iのそれぞれの群から、分布にまとまりがある板本C・G、また分布が拡散しているD・Iを、示す。最頻値に下線を施す。このように分解すると、文字数31・漢字数0の組み合わせが目立つ。

C	漢字	0	1	2	3	4	7
文字	215	50	80	56	21	7	1
33	2	2	-	-	-	-	-
32	20	13	5	1	-	-	1
31	82	35	35	8	4	-	-
30	75	-	<u>40</u>	27	7	1	-
29	32	-	-	20	8	4	-
28	4	-	-	-	2	2	-

D	漢字	0	1	2	3	4	5	6	7	8
文字	215	61	82	42	20	3	4	1	1	1
32	19	10	5	3	-	-	-	-	-	1
31	<u>91</u>	<u>51</u>	34	3	2	-	1	-	-	-
30	62	-	42	15	3	-	1	1	-	-
29	34	-	1	21	10	-	1	-	1	-
28	7	-	-	-	5	1	1	-	-	-
27	2	-	-	-	-	2	-	-	-	-

G	漢字	0	1	2	3	4
文字	218	99	71	38	9	1
33	4	2	1	-	-	1
32	26	20	2	3	1	-
31	<u>149</u>	<u>77</u>	54	17	1	-
30	35	-	14	17	4	-
29	4	-	-	1	3	-

I	漢字	0	1	2	3	4	5	6	7
文字	218	59	69	50	19	15	3	1	2
33	3	2	-	-	-	-	-	-	1
32	12	8	3	1	-	-	-	-	-
31	<u>78</u>	<u>48</u>	23	5	1	1	-	-	-
30	71	1	41	26	3	-	-	-	-
29	26	-	2	14	8	2	-	-	-
28	16	-	-	3	4	9	-	-	-
27	9	-	-	1	3	3	1	-	1
26	1	-	-	-	-	-	-	1	-
24	2	-	-	-	-	-	2	-	-

御家流あるいは他流派の近世板本では、書の範として、漢詩の漢字に対して和歌の仮名を重視するということがあったかもしれない。しかし、漢字出現の抑制は、板本E・Fにまで行き亘ったとは言い難い。板本E・Fは、書の範であるよりは、註釈をすることを意識したかもしれない。註釈がまず漢字を充てるというのは、ありうることである。

漢字数最大の短歌は、板本Fのほかは602番歌である。仏事の類にあつて、仏教の漢語を漢字によって表している。板本Fのものも併せてその602番歌を掲げる。この前後の短歌にも仏教語が現れることは、2. 1に触れた。()内は文字数・漢字数である。

A 602 (32 8) 阿のく多羅三みやく三ぼだいの仏たちわがたつそまに冥加あらせたまへ

B 602 (32 7) 阿のく多ら三みやく三ぼだいの仏たちわがたつそまに冥加あらせたまへ

C 602 (32 7) 阿のく多ら三みやく三ぼだひの仏たちわがたつそまに冥加あらせたまへ

D 602 (32 8) 阿のく多羅三みやく三ぼだいの仏たちわがたつそまに冥加あらせたまへ

E 602 (29 10) あのかく多ら三みやく三菩提の仏たちわがたつ杣に冥加あらせ給へ

F 602 (30 7) あのかくたら三みやく三ぼだいの仏達わがたつ杣に冥加あらせたまへ

G 602 (33 4) あのかくたら三みやく三ぼだいの仏たち

わがたつそまにみやうがあらせ給へ

H 602 (34 6) 阿のく多羅三みやく三ぼだいの仏たち

わがたつそまにみやうがあらせたまへ

I 602 (33 7) 阿のく多羅三みやく三ぼだいの仏たち

わがたつそまにみやうがあらせ給へ

602番歌のほかで漢字数が最大ないしそれに次ぐものを掲げる。伝本Aの助詞「こそ(去年)」, D~Fの名詞「わた(和田)」に問題があることは、承知している。

A 490 (31 5) ありあけの心地去年すれさかづきに日かげもそひていでぬとおもへば

B 78 (28 4) 春がすみたてるやいづこみよし野のよしの山に雪はふりつゝ

C 100 (28 4) 君ならでたれにか見せむむめのはな色をもかをもしる人ぞしる

D 648 (29 7) 和田のはら八十島かけてこぎ出ぬと人にはつけよあまのつりぶね

E 648 (27 9) 和田のはら八十島かけてこぎいでぬと人には告よあまの釣舟

F 648 (28 8) 和田の原八十島かけてこぎいでぬと人にはつけよあまのつり舟

G 789 (27 7) 今来むといひしばかりに長月のありあけの月をまち出つる哉

H 639 (26 4) としごとの春の別をあはれとも人におくる人ぞしりける

I 519 (26 6) としを経て花のかぐみと成水は散かゝるをや曇といふらむ

3. 3 漢字を次次ページ以下に一覧する。漢字一覧が収める字数は237であり、すなわち9本全体での異なり字数である。

板本A～D・G～Iに現れる漢字は178字であり、その7本の出現頻度の合計で排列するならば、次のようである。数字は7本の出現頻度合計である。

144 人	20 千
125 見	19 袖
100 月	18 雪
84 山	15 心
80 野	14 空 井 恋
71 世	13 代
63 中	11 夏 手
57 葉	10 出 哉
50 身	9 屋 物
49 花	8 音 風 木 名
46 夜	7 仏
40 君	6 影 河 共 時 多 竹 冬 年 里 阿
37 春	5 浦 我 散 松 成 夕 霧 立 浪
32 色	4 衛 火 加 去 今 田 梅 尾 冥 有 羅 覽 萩
29 水	3 一 岩 菊 行 高 砂 津 吹 都 白 無 柳 老 曳
28 雲 神	2 雨 塩 何 吉 給 玉 計 結 荒 事 住 女 消 声 霜
26 辺	地 波 聞 別 峰 堀 万 鳴 路
25 秋 川	1 引 煙 桜 下 垣 郭 覚 寒 間 岸 幾 久 宮 御 錦
24 思	契 経 公 光 在 咲 子 鹿 車 守 舟 十 宿 初 常
23 三	植 深 石 跡 積 相 足 待 大 誰 置 長 朝 天 島
22 露	道 曇 入 八 盤 氷 敷 明 面 友 来 和 也 塵 漕
21 草 日	雫 霞 駕 鶯

漢字「人」が首位に立ち、「花」が10位に落ちて、古写三本との違いはある。しかし、全体的な印象としては、古今和歌集の表記における漢字と同様であって、歌語との関係を想像することができる。漢字個個に立ち入る余裕は、いまはなくなった。

板本E・Fのみに現れるものは59字であり、次のようである。

陰 乙 家 海 楽 九 牛 魚 郷 極 劍 原 古 五 吳 香 降 告 谷 駒 菜 最 罪 糸 社
 若 小 鐘 上 森 生 青 清 先 浅 達 釣 鶴 提 摘 難 板 姫 暮 法 妹 夢 流 輪 籠
 仇 杣 楨 此 笠 苔 荻 菩 袂

前項末尾に触れた助詞「去年」・名詞「和田」に似るものを、幾つか記し留める。

- E469 ことのねに みねのまつかぜ かよふらし いづれのおより しらべそめ劍
 A519 としをへて 花のかゞみと なる水は ちりかゝるをや くもるといふ覽
 E526 みかきもり そのたくひには あらねども われもこゝろの うちに社たけ
 B260 よにふれば ものおもふとしも なけれ共 月にいくたび ながめしつらむ
 E638 おもひやる こゝろ計は さはらじを 何へだつらん みねのしら雲
 H142 河津なく 神なみがはに かげみえて いまやさくらん やまぶきのはな

和漢朗詠集 近世板本 漢字一覽

	A	B	C	D	E	F	G	H	I		A	B	C	D	E	F	G	H	I
一	-	1	1	1	2	3	-	-	-	極	-	-	-	-	1	1	-	-	-
引	-	1	-	-	-	2	-	-	-	玉	-	-	-	-	4	4	-	1	1
陰	-	-	-	-	2	1	-	-	-	錦	-	-	-	-	-	-	-	1	-
雨	-	1	1	-	2	2	-	-	-	空	1	3	3	3	-	1	-	2	2
浦	-	-	-	-	-	-	-	3	2	君	7	8	8	9	11	7	-	3	5
雲	5	5	5	5	9	7	-	3	5	契	-	-	-	-	-	-	-	-	1
影	1	1	1	2	3	3	-	1	-	計	-	-	-	-	1	-	-	-	2
衛	1	1	1	1	-	-	-	-	-	經	-	-	-	-	1	-	-	-	1
煙	-	-	-	-	1	1	-	-	1	結	-	1	1	-	-	1	-	-	-
塩	-	-	-	-	-	-	-	2	-	月	15	15	15	13	19	20	15	13	14
桜	-	-	-	-	-	-	-	-	1	見	8	19	23	12	3	7	41	8	14
屋	2	2	2	1	-	-	1	1	-	劍	-	-	-	-	1	-	-	-	-
乙	-	-	-	-	1	-	-	-	-	原	-	-	-	-	1	2	-	-	-
音	-	3	3	-	1	-	-	1	1	古	-	-	-	-	1	1	-	-	-
下	-	-	-	-	2	1	-	-	1	五	-	-	-	-	-	1	-	-	-
火	-	1	1	1	1	1	1	-	-	吳	-	-	-	-	1	-	-	-	-
加	1	1	1	1	1	1	-	-	-	公	-	-	-	-	-	-	-	-	1
何	-	-	-	-	4	3	-	1	1	光	-	-	-	-	-	-	-	-	1
花	12	6	6	5	6	5	1	8	11	行	1	1	1	-	-	1	-	-	-
河	-	-	-	2	1	3	-	2	2	荒	-	-	-	-	-	-	-	-	2
夏	1	4	4	2	6	4	-	-	-	香	-	-	-	-	3	3	-	-	-
家	-	-	-	-	2	2	-	-	-	降	-	-	-	-	-	1	-	-	-
我	1	1	-	1	5	3	-	1	1	高	-	-	-	1	-	-	-	1	1
海	-	-	-	-	1	-	-	-	-	告	-	-	-	-	1	-	-	-	-
垣	-	-	-	-	-	-	-	-	1	谷	-	-	-	-	1	1	-	-	-
郭	-	-	-	-	-	-	-	-	1	駒	-	-	-	-	1	1	-	-	-
覺	-	-	-	-	1	-	-	-	1	今	-	-	-	2	2	-	-	-	2
樂	-	-	-	-	1	1	-	-	-	砂	-	-	-	1	-	-	-	1	1
寒	-	-	-	-	-	-	-	-	1	菜	-	-	-	-	2	-	-	-	-
間	-	-	-	-	2	-	-	-	1	最	-	-	-	-	1	1	-	-	-
岸	-	-	-	-	1	-	-	-	1	在	-	-	-	-	-	-	-	1	-
岩	-	1	1	-	-	-	-	1	-	罪	-	-	-	-	1	1	-	-	-
幾	-	1	-	-	-	-	-	-	-	咲	-	-	-	-	-	1	-	-	1
菊	-	-	-	1	-	1	-	-	2	三	4	3	4	3	6	5	4	2	3
吉	-	-	-	-	-	-	-	1	1	山	9	14	15	14	12	10	2	13	17
九	-	-	-	-	1	1	-	-	-	散	-	-	-	2	2	-	-	-	3
久	-	-	-	-	-	-	-	-	1	子	-	-	-	1	4	4	-	-	-
宮	-	-	-	1	-	1	-	-	-	糸	-	-	-	-	1	1	-	-	-
給	-	-	-	-	1	-	1	-	1	思	2	4	4	7	12	5	2	2	3
牛	-	-	-	-	1	1	-	-	-	事	-	1	1	-	-	-	-	-	-
去	2	-	-	2	-	-	-	-	-	時	1	1	1	-	1	1	1	1	1
魚	-	-	-	-	1	-	-	-	-	鹿	-	-	-	-	1	1	-	1	-
御	-	-	-	-	-	-	-	-	1	社	-	-	-	-	1	-	-	-	-
共	-	2	2	-	-	-	1	-	1	車	-	-	-	-	1	1	-	-	1
鄉	-	-	-	-	1	1	-	-	-	若	-	-	-	-	2	-	-	-	-
	A	B	C	D	E	F	G	H	I		A	B	C	D	E	F	G	H	I

	A	B	C	D	E	F	G	H	I		A	B	C	D	E	F	G	H	I
手	1	2	3	2	1	2	-	1	2	草	2	3	3	3	3	6	2	4	4
守	-	-	-	-	-	-	-	-	1	霜	-	-	-	-	2	2	-	-	2
舟	-	-	-	1	3	2	-	-	-	足	-	-	-	-	-	-	-	1	-
秋	3	4	4	-	11	13	3	2	9	多	1	1	1	1	1	-	-	1	1
袖	3	3	3	3	1	3	1	3	3	待	-	-	-	-	1	-	-	-	1
十	-	-	-	1	1	1	-	-	-	大	-	-	-	1	-	-	-	-	-
住	-	-	-	-	-	-	-	1	1	代	-	2	2	2	3	5	3	2	2
宿	-	-	-	-	2	1	-	-	1	達	-	-	-	-	-	1	-	-	-
出	1	2	2	1	2	-	1	1	2	誰	-	-	-	1	4	2	-	-	-
春	3	7	7	5	18	9	2	4	9	地	1	-	-	1	-	-	-	-	-
初	-	-	-	-	2	1	-	-	1	置	-	1	-	-	-	-	-	-	-
女	1	-	-	1	1	-	-	-	-	竹	1	1	1	2	2	-	-	1	-
小	-	-	-	-	-	1	-	-	-	中	9	10	10	10	11	11	9	7	8
松	-	1	2	1	6	3	-	1	-	長	-	-	-	-	-	-	-	-	1
消	-	-	-	-	-	-	-	1	1	釣	-	-	-	-	1	-	-	-	-
鐘	-	-	-	-	1	-	-	-	-	朝	-	-	1	-	4	2	-	-	-
上	-	-	-	-	2	-	-	-	-	鶴	-	-	-	-	2	2	-	-	-
常	-	-	-	-	-	-	-	-	1	提	-	-	-	-	1	-	-	-	-
色	7	8	8	7	5	4	-	1	1	摘	-	-	-	-	1	-	-	-	-
植	-	-	-	-	-	-	-	-	1	天	-	-	-	1	4	4	-	-	-
心	1	3	2	2	3	2	-	4	3	田	-	1	1	1	6	6	1	-	-
身	8	8	8	8	7	7	6	5	7	都	-	-	-	-	-	1	-	-	3
津	-	-	-	1	2	-	-	1	1	冬	-	-	-	-	3	1	-	3	3
神	4	4	4	4	5	5	4	4	4	島	-	-	-	1	2	1	-	-	-
深	-	-	-	-	-	-	-	-	1	道	-	-	-	-	-	-	-	1	-
森	-	-	-	-	2	1	-	-	-	曇	-	-	-	-	-	-	-	-	1
人	29	28	28	27	34	30	3	13	16	難	-	-	-	-	1	-	-	-	-
水	3	6	6	6	5	5	1	2	5	日	3	5	5	5	6	5	2	-	1
吹	1	-	-	1	1	1	-	-	1	入	-	-	-	-	-	-	-	-	1
井	2	2	2	2	2	2	2	2	2	年	2	-	-	3	1	-	1	-	-
世	9	11	10	9	4	9	11	9	12	波	-	-	-	-	1	-	-	2	-
生	-	-	-	-	1	-	-	-	-	梅	-	-	-	1	-	2	-	2	1
成	-	1	1	-	1	1	-	-	3	白	-	-	-	-	2	1	-	1	2
声	-	1	1	-	-	-	-	-	-	八	-	-	-	1	1	1	-	-	-
青	-	-	-	-	3	3	-	-	-	板	-	-	-	-	1	-	-	-	-
清	-	-	-	-	1	-	-	-	-	盤	-	-	-	-	-	-	-	-	1
夕	1	1	1	1	1	1	-	-	1	尾	1	1	1	1	1	2	-	-	-
石	-	-	-	1	1	-	-	-	-	姫	-	-	-	-	1	1	-	-	-
跡	-	-	-	-	-	-	-	-	1	氷	-	-	-	-	3	2	-	-	1
積	-	-	-	-	1	-	-	-	1	敷	-	-	-	-	-	-	-	-	1
雪	3	6	6	2	12	12	-	1	-	風	3	-	-	-	4	5	2	2	1
千	4	4	5	3	3	3	2	1	1	仏	1	1	1	1	1	1	1	1	1
川	3	6	6	5	9	8	1	1	3	物	-	1	1	-	-	1	1	4	2
先	-	-	-	-	1	1	-	-	-	聞	-	-	-	-	-	-	-	-	2
淺	-	-	-	-	1	1	-	-	-	別	-	-	-	-	-	-	-	1	1
相	-	-	-	-	-	-	-	-	1	辺	2	4	4	2	6	5	5	5	4
	A	B	C	D	E	F	G	H	I		A	B	C	D	E	F	G	H	I

	A	B	C	D	E	F	G	H	I		A	B	C	D	E	F	G	H	I
暮	-	-	-	-	2	1	-	-	-	恋	2	1	1	1	3	3	1	3	5
法	-	-	-	-	1	1	-	-	-	路	-	-	-	-	2	2	-	1	1
峰	-	-	-	1	-	-	-	-	1	露	2	4	4	5	6	5	2	3	2
木	1	2	2	1	5	5	2	-	-	老	-	-	-	2	1	1	-	-	1
堀	1	-	-	1	1	-	-	-	-	浪	1	-	-	1	4	5	-	-	3
妹	-	-	-	-	1	-	-	-	-	籠	-	-	-	-	1	-	-	-	-
万	-	-	-	-	-	-	-	1	1	和	-	-	-	1	2	2	-	-	-
無	-	-	-	-	1	2	1	1	1	也	-	-	-	-	2	-	-	-	1
夢	-	-	-	-	2	-	-	-	-	仇	-	-	-	-	1	1	-	-	-
霧	1	1	1	2	1	1	-	-	-	哉	1	-	-	2	1	1	-	1	6
名	2	2	2	2	3	3	-	-	-	塵	-	-	-	1	-	-	-	-	-
明	-	-	-	1	3	3	-	-	-	曳	-	-	-	1	3	1	-	1	1
冥	1	1	1	1	1	1	-	-	-	杣	-	-	-	-	1	1	-	-	-
鳴	-	-	-	-	2	2	1	-	1	楨	-	-	-	-	1	1	-	-	-
面	-	-	-	1	1	1	-	-	-	此	-	-	-	-	2	1	-	-	-
夜	1	9	9	1	2	9	9	8	9	漕	-	-	-	-	-	-	-	-	1
野	7	13	13	12	10	10	18	10	7	笠	-	-	-	-	1	1	-	-	-
友	-	-	-	-	1	-	-	-	1	苔	-	-	-	-	1	-	-	-	-
有	-	-	-	2	1	2	-	-	2	荻	-	-	-	-	1	-	-	-	-
葉	6	6	7	6	7	10	9	13	10	菩	-	-	-	-	1	-	-	-	-
羅	1	-	-	1	-	-	-	1	1	菽	-	-	-	2	-	-	-	-	2
来	-	-	-	-	-	1	-	-	1	袂	-	-	-	-	1	-	-	-	-
覽	1	1	1	1	1	-	-	-	-	阿	1	1	1	1	-	-	-	1	1
里	-	1	1	1	-	-	1	2	-	雫	-	-	-	-	1	-	-	-	1
立	-	2	2	-	-	-	-	-	1	霞	-	-	-	1	1	1	-	-	-
柳	-	-	-	-	4	3	-	1	2	鴛	-	-	-	1	-	-	-	-	-
流	-	-	-	-	1	1	-	-	-	鶯	-	-	-	-	-	-	-	-	1
輪	-	-	-	-	1	1	-	-	-										
	A	B	C	D	E	F	G	H	I		A	B	C	D	E	F	G	H	I

参考文献

石井 久雄 (2013) 古今和歌集元永本の周辺における漢字。

立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要 7 pp.1-22。

…… 古今和歌集高野切の漢字を異なり5字・延べ8字としたが、その後、高野切の範囲を拡張し、本稿冒頭に記したように異なり6字・延べ9字とする。増えた1字は「人」である。

石井 久雄 (2014) 現代における古今和歌表記の漢字。

立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要 8 pp.1-22。